

日本における最初の私立幼稚園とその背景 (4)

——横浜のミッシヨンホーム（亜米利加婦人教授所）

における女子教育と幼児教育——

小林 恵子

日本における最初の私立幼稚園は明治十三年四月に創立された桜井女学校附属幼稚園であると考えられることを三回にわたって述べさせて頂いた。

今回は趣向を変え、この私立幼稚園が誕生されるに至った最初の萌芽はどこにあったか、どのような時代と思想が背景にあったか、明治初期にさかのぼって考察してみたい。

(一) 女子教育との関連

日本における幼稚園の創設は、明治のはじめ当時の文

部省関係者に極めて進歩的な考えを持ち欧米の教育制度に学ぼうとする人々が多数あったことがその推進力となっている。そして幼稚園は、こうした明治初期の文明開化のなかで女子教育と密接に関連し萌芽し誕生したと考えられる。女子教育の先駆は、米国プロテスタント（新教）の婦人宣教師、キダー（Mary Eddy Kinder）が明治三年、横浜居留地三九番館のヘボン治療所で、ヘボン夫人が教えていた生徒を引き受け、女子のみの教育機関として発展させた学校（現・フェリス女学院）が最初である。

ところで、私立幼稚園の誕生も女子教育と関連し、宣教師、とくに婦人宣教師が日本の女子教育のために先駆的な働きをしたことゝ密接な関係をもって萌芽したといふことができる。日本で最初の私立幼稚園、桜井女学校附属幼稚園もその苗床はキリスト教主義の女子教育であり、創立者の桜井ちかは横浜のミッション・ホームの婦人宣教師に学んだ生徒であった。このため、女子教育の問題から考察をすゝめたい。

(二) 明治初期の女子教育と混血児の問題

プロテスタントの宣教師が日本に来たのは政府が日米通商条約締結の翌年、横浜、長崎、函館の三港を開いた安政六年（一八五九）である。欧米の諸教会は、それ以前から外国伝道への使命に燃え中国、朝鮮、印度と布教を開始した。特に米国プロテスタント各派の諸教会は、すぐれた宣教師を日本に派遣し近代化の推進に開拓者の役割を果たした。医学、自然科学、文学、音楽など多くの分野がその源泉にキリスト教の影響を少なからず受け

ているがそこには宣教師が最初に小さな種をまいていた事実にいぎあたる。女子教育や幼児教育も最初の種をまいたのは宣教師である。それは横浜を中心として活躍した宣教師で幕末から明治の始め、キリスト教禁制下に来日したヘボン夫妻 (J.C. Hepburn) ブラウン (S.B. Brown) フルビッキー (G.F. Verbeck) バン (D.V. James Brilagh) など日本の医学や教育・文化面で偉大な業績を残した人々である。

さて、宣教師たちが日本に来て最も驚いたことは男尊女卑の封建社会のなかで婦人の社会的地位が極めて低く女子教育が著るしく遅れていたことである。徳川時代から女子教育に対する世間一般の考えは儒教精神にたつ貝原益軒の「女大学」が金科玉条とされ女子に学問は無益と考えられてきた。こうした女子への蔑視と束縛に対し女子教育こそ緊急の事業であると宣教師たちが考えたのは当然のことであったと云えよう。ブラウンは「女子教育は日本がキリスト教国の仲間入りする前にやりとげなければなりません。そしてその仕事は今すぐ始めるべき

です⁽¹⁾と主張し、ミス・キダーがブラウン一家に伴われ、リフォームド教会外国伝道協会から派遣されたのは明治二年であった。未婚の婦人宣教師としては最初の来日で「キダー書簡集」^(註2)には当時の女子教育の様子が日記として記されている。

さて、開港場もない横浜では、外国商人と日本の「らしゅめん」と称する女性との間に生れた混血児が社会的問題となり、宣教師たちの心を痛めた。このため、バラは緊急とされる女子教育機関の設立とともに混血児問題の救済について米国の基督教会に訴えたのである。

① The Woman's Union Missionary Society (W.U.M.S.)

この訴えに応じたのが米国婦人一致外国伝道協会 (The Woman's Union Missionary Society) である。

この協会は、一八六〇年、東洋の婦人と子どもとの伝道と教育、福祉を願ってドリーマス夫人 (Doremus, Sarah Platt Haines 1802~1877) によってニューヨークに創立された。一八六一年は南北戦争が始まった年で奴隷解放

にみられるように人道主義にもとづく運動が各所で展開され、米国では南北戦争を機として社会的な変転期を迎えていた。人格の尊厳の意識と、自由平等の理想および社会改革の精神が旺盛となり、宗教団体によって種々の社会事業がすゝめられた。禁酒運動、廢娼運動、監獄改良、孤児教育、白痴教育などである。幼稚園運動もその一つで社会改良と結びつき、貧困児童のため各所に無料の幼稚園が設立されるなど博愛主義に根ざして展開されたのである。

W・U・M・Sの創立者で初代会長のドリーマス夫人はキリスト教を基盤としてたつ社会事業家で彼女の関心の多くは虐げられた女性たちに向けられた。ニューヨーク市の監獄の惨状に強く心をうたれ、監獄の改良とともに釈放された女性の囚人のために避難場所ともなる家庭的なホームを設立したり、乏しい婦人労働者のため保育所や病院を設立するなど多方面にわたる社会福祉事業を行っている。^(註3) 東洋の婦人と子どものために設立された米
国婦人一致外国伝道協会 (W・U・M・S) は一八六〇

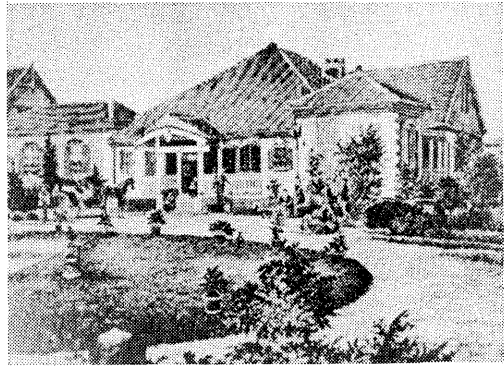
年十一月に創立され、翌年二月に伝道会社として発足した超教派によるミッシヨンボードであった。夫人は改革派教会の一員であったが教派によらず教会婦人会が一致して婦人宣教師を東洋に派遣することを提唱し、これに賛同する多くの婦人たちは献身的な努力と苦心を重ね、衣服や調度品等を売るなどして資金を拵え、東洋の各地へ婦人宣教師を派遣したのである。

日本には明治四年、三人の婦人宣教師が始めて来日したが、当時は渡航も大変で、動乱の社会事情に加えキリスト教は邪教として嫌われてきただけに婦人宣教師の派遣は極めて危険の多い冒険的な事業であった。こうした困難な日本の社会を覚悟で来日した婦人宣教師はミセス・ブライン (Mary Prun) を代表者とし、ミス・クロスピー (Julian Crosby 1833~1918) ミセス・ピアソン (Louis Pierson 1832~1899) である。「横浜共立学園八十年史」には次のように記されている。「三女史は同年五月十八日、米国汽船会社の「日本号」に乗船してニューヨーク市を出帆し、航海実に三十有九日、初夏のどん

より曇った六月二十五日の朝、横浜港に安着した。三人はバラ氏に迎えられて上陸し、それぞれ宣教師の宅に一時分宿した。其の日は偶々安息日であったので、彼等は上陸^{オウチウ}勿々礼拝所に出席した。そこは外国人居留地三十九番のヘボン博士の治療所であった。(その場所は旧谷戸橋々畔で現在の横浜市中区山下町三十九番地である。)」また「三女史は日本到着後わずか二ヶ月にして、横浜山手四十八番館を賃借し之に多少の修繕を加え明治四年八月二十八日を以て、アメリカン・ミッシヨン・ホーム^{註(4)}(亜米利加婦人教授所)を開始した」。

(四) ミッシヨン・ホーム(亜米利加婦人教授所)

さて、ホームは寄宿も通学もできる家庭的組織として発足したが人々は西洋婦人を恐れ近寄らず混血児の問題も実際にはたいしたことがなく最初入学したのは横浜に駐屯していた英国聯隊の女兒姉妹二人であったという。^{註(5)}このため三女子は女子教育の必要をどのようにして覚らせたらよいか大変苦勞したようで、クロスビーの当時の



ミッション・ホーム

追懐に「奈如どんなにしても生徒が参りません。仕方がなくて市街まちを通りながら、或は学校の門前を通る女の子を見ますと、何卒被入いっつしやい被入いっつしやいと勧めたほどであります。⁽⁶⁾とある。こうした三女子の献身的な姿をみて心を動かされたのが中村正直である。彼は英国留学中、イギリスの母親の知識や教養の高いのを見て日本の母親を省

み、女子教育に力を入れなければ日本は危いと痛切に感じていた人である。のちに「善良ナル母ヲ造ル説」を書き東京女子師範学校の摂理として、幼稚園設立を最初に建議したのも彼であった。中村がこのホームに滞在したのはクラークを迎えるため横浜に赴いたときで、^(註7)このとき彼がこのホームのため自ら生徒募集広告を書いたのである。

亜米利加婦人教授所横浜山ノ手 告示

MARY PRUYN.

Superintendent.

JULIAN. CROSBY.

LOUIS PIERSON.

Assistants

馬利・普拉延
 如利亞・古羅士倍
 栗斯・比爾遜

コノ教授所ハ、亜米利加婦人伝道会社ニテ設クルトコロニシテ、日本人、外国人ノ差別ナク、ソノ父母ソノ兒子ヲ教養セント欲スルモノアラバ、コノ教授所ニテ引受ケ世話ヲ致ストコロナリ。三歳以下ノ小児ハ、引受ケザル事。但シ母ナキモノハ、引受クベシ。凡ソ小児、入塾ナリトモ、通稽古ナリトモ、ソノ意ニ任スベ

シ。然レドモ入塾ノ方、小児ノ為メニ、益アルベキナリ。
モシ小児ノ母、衣服洗濯等、ソノ外ノ事マデモ、一切世話ヲ頼ミ
度バ、女教師コレヲ引受クベシ。モシソノ父、ソノ小児ノ来ラン
コトヲ欲セバ、ソノ小児親ノ許（省問スルヲ得ベシ）。
モシソノ父母、教授所ニ来リ、ソノ小児ニ逢ハント欲セバ、午後
第四時ヨリ、第五時マデノ間ナルベシ。病氣ノ時ハ、何時ニ拘ラ
ズ見舞ニ来ルベシ。
教授及ビ食物、居住ノ費用トシテ、毎月十元（ドル）ヨリ十五元（ドル）マデ
ヲ出スベシ。通稱古ノ者ハ、毎月四元（ドル）ヲ出スベキ事。
会社ニテ、コノ教授所ノ、百事便利ニテ且ツ有益ノ功効アルベキ
ヤウニト心ヲ尽セリ。日本人、外国人ノ差別ナク、懇意トナリタ
ル人ハ随意ニ訪問スベシ。コ、ニ居ル小児ハ、実母ノ如キ親愛ノ
心ヲ以テ、万事ニ心ヲ付ケ、世話ヲ受ルヲ得ルコトナリ。ソノ他、
委細ノ事ハ、コノ教授所ニ来リ、教師ニ逢フテ、問ヒ給フベシ。
余十余日、コノ教授所ニ寓セリ。コノ三ノ女教師、何モ親切
懇切ナル人ナリ。現今小児四人アリテ、教師ノ世話ヲ受テ居
レリ。実母妻子カト疑ハル、ホドニ、相離（あなはな）和親愛セリ。一ニ
ハ、知慧生長スベク、二ニハ身体強壯ナルベシト思ハル、ナ
リ。世ノ父母、モシソノ兒子ノ善キ教養ヲ受ント思フモノ、
コノ教授所ニ託シ置カバ、イカバカリカ、ソノ家ニテ育ツル
ヨリハ善カルベキナリ。

明治四年辛未十月

（原文は横浜市百年史編纂所所蔵）

中村正直

NAKAMURA

この広告文をみると「小児四人アリテ」とあり小人数
であるが混血児の保有がなされていた事が理解できる。
三人の婦人宣教師の子どもへの接し方が「実母妻子カト
疑ハルホドニ」心がいき届いていたこと、「日本人、
外国人ノ差別ナク」引受け世話をするところとしている
ことなどから人種や国境をこえた国際色豊かな家庭的な
ホームであり学校であった事が想像できる。この三人の
働きに中村がよほど心を動かされたらしいことは娘たち
をこゝに入学させたことでも推察される。註(9)中村の募集広
告は欧米の文化を吸収しようとする有識者や向学心に富
む女子を刺激し、やがて福沢諭吉の娘三人と姪の福沢き
よ、井上馨の娘二人、北村耕霞、西田けい子、菱川やす
子などが入学し、同年クリスマスには二十名に達したと
ある。註(9)

さて、混血児の問題は、これ以上人数がふえなかつた
らしく「横浜共立学園八十年史」に混血児のことは「か
ねて米国に在って聞き及んだことと事実大いに相違し、
其の状態は頗る改善され、適宜な方法によって養育せら

れ」とあり「学校本来の目的たる女子教育に専心することと決し、四、五名を除くの外、男生徒は悉く之を謝絶するの止むなきに至った。」と記されている。^{註(10)}この男生徒というのは英語学習を志す青年男子に英語と聖書をピアソンが教えていたもので創立当初、女生徒が集まらず、午前男子部として教授していたものである。こうして、この学校は翌、五年の十月、女生徒数増加に伴い場所を山手二百十二番に移転した。そこは宣教師、ブラウンの邸宅に隣接しており、ブラウンはこゝで聖書を和訳し、ブラウン塾を開き日本文化に多大な貢献をした青年男子を数多く生みだした場所である。移転後、同年十二月に名を日本婦女英学校 (English School for Japanese Ladies) と改称した。この学校が現在の横浜共立学園である。日本では通称「二百十二番」「Dear Old 212 Bluffs」として卒業生に親しまれ米国ではドリーマス夫人の名に因み、ドリーマス・スクール (Doremus School) と呼ばれた。

この学校では創立当初、入塾していた混血児の養育が

ずっと続けられ、「横浜共立学園八十年史」に「新校舎は同年十二月下旬落成したが、更に明治七年（一九七四年）食堂を増築し、且つ混血児の爲めに新に寄宿舎を建て、彼等と日本の女子とは、教室に於ては男女共学であったが、其の宿舎を別々にした^{註(11)}」とあり、子ども達が巣立つまで世話が続けられたことが理解される。

(11) 婦人宣教師に接し学んだ人々

三人の婦人宣教師については詳細な資料がなく米国でどの大学を卒業したか、幼稚園設立の志があったかどうかなど明らかでない。PLAINは病気のため明治八年十月に帰国するが、ピアソンとクロスビーは、その生涯を日本に献げ横浜の外人墓地に両女史の墓が並んで立っている。讚美歌の翻訳者として「自我を愛す」などを訳したクロスビーの墓には、パイオニヤ（開拓者）の文字が刻まれニューヨークで生れたとある。ピアソンは婦人伝道者の養成に力を注ぎ日本各地へ精力的に伝道している。日曜学校や家庭訪問、聖書講読、集会などが主な伝

道方法で、とくに日曜学校には幼児たちが来て大きな掛図や聖画などで日本語の不自由な片言の宣教師の話聞き讚美歌を歌ったのである。日本で最初の宣教による超教派的な教会「日本基督公会」(現・海岸教会)は、バラが牧師であったが、「ピアソン女史は数十名の女生徒を引率して之れに参列し、自ら洋琴を奏し、讚美歌を歌い、又自ら熱誠なる祈禱を以てこの集会を助けたり」とある。^{註④}

こゝで思いおこすことは、三人が日曜日に礼拝を守った「日本基督公会」に関信三がいたことである。彼は本願寺の僧侶で基督教の探偵が目的で宣教師と交わり、明治五年この教会でバラから洗礼を受けている。当時は安藤劉太郎と云ったが本願寺の法王に随行し洋行して帰朝後は僧侶をやめ改名した。その後東京女子師範学校附属幼稚園の初代監事(園長)として活躍し、松野クララの通訳をつとめ「幼稚園創立法」「幼稚園法二十遊戯」などの書を著し幼児教育、女子教育に貢献したことは知られるところである。

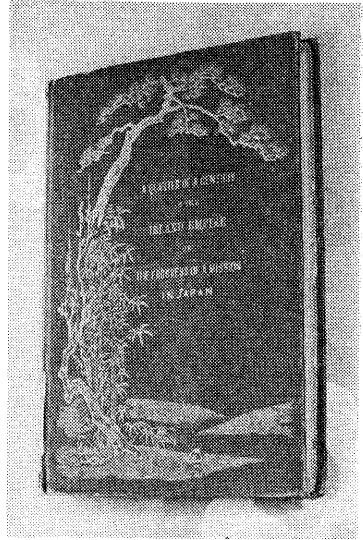
さて、こゝで問題にしたい事は、横浜を中心として活

躍した宣教師たち、とくにミッション・ホームにおける婦人宣教師の実践的な働きが日本の女子教育、幼児教育に与えた影響である。海を渡って混血児の救済に來日した彼女たちのけなげな心意気が接する日本人に何らかの感動をよびさまざまにはおかなかつたということである。日本の幼児教育の基盤を築き国立系・私立系の幼稚園の草分けとなった指導者がこうした宣教師に接し学んだ人々のなかから輩出していることは興味ぶかい。日本で最初の国立系の幼稚園、東京女子師範学校附属幼稚園の設立に最も貢献した中村正直や園長の関信三はすでに述べたように宣教師たちと接した人々であった。

日本で最初の私立幼稚園、桜井女学校附属幼稚園の設立者、桜井ちかもこの学校に学び影響を受けた一人である。このことは次回で述べたいと思うが幼稚園は女子教育の重要な教育分野として着手されたものである。

ピアソンの書いた“A Quarter of a Century in the Island Empire or the Progress of a mission in Japan”^{註⑤}

には日本での宣教の足跡が記されているが、創立当初の



日本における伝道について書いたピアソンの著書

卒業生との同窓会の記事も掲載されている。同窓会に集った人々の顔ぶれには、二宮わか、西田けい、武村耕靄など幼児教育に関係の深い人々がみられ興味深い。その日、耕靄のデザインによる瓶が贈られ、宣教師への感謝状に自分たちは実の母と娘のように大切に扱われたとある。二宮はキリスト教社会事業家として横浜の貧困な地域に「相沢託児所」「中村愛児園」を設立し女子教育と児童福祉事業の先駆者となった人である。ドリーマス夫人の精神が卒業生に受けつがれ実践されたとみるべきで

あろう。桜井ちかも貧学校を開いたが、その精神はキリスト教思想にたつ人格の尊厳の理念と社会改革をめざしたものと考えられる。西田けいは桜井女学校で教えたのち渡米、フィラデルフィアで医学を修め慈恵病院婦人科主任となり、辞任後、立教や頌栄女学校で看護や育児を教え頌栄幼稚園の設立者兼園長となった。二宮も桜井も西田も家庭をもち妻として社会的に活躍した人々である。武村は本名を千佐子と言い女流画家として耕靄と号した。卒業後、東京女子師範学校で絵画と英語を教え二十余年、職員として勤務したが、当時の附属幼稚園の実況を描いた作品はお茶の水女子大学附属幼稚園に今日も所蔵されている。この作品は明治二十三年日本美術協会秋期展覧会に出品されたものであるがフレール式保育の幼稚園の実況がよく描かれ作者の幼稚園に対する理解が伺われる。

この他、婦人宣教師キダーに学んだフェリスの卒業生に原田良がいる。彼女のことは「キダー書簡集」に受洗した一人の学生として「この生徒はキリスト教について

はできるだけ知りたくないといって、長い間キリスト教に反抗してきました。今私たちは彼女が真のキリスト教徒になってくれることを願っています。」と記されている。その後、原田は東京女子師範学校保母科に学び、明治十三年七月に卒業し十月から開園されたブリテン女学校(現・成美学園)の附属幼稚園の最初の保母として活躍した。興味ぶかいことに、その建物は、「ミッシェン・ホーム」のあの建物で、女学校と幼稚園がW・U・M・Sから派遣された婦人宣教師、ミス・ブリテン(Harriet G. Britain)によって開設されたことである。^(註5)その幼稚園は桜井女学校附属幼稚園に続き二番目に古いキリスト教主義幼稚園(現・早苗幼稚園)であった。

(国立音楽大学)

註(1) 高谷道男、太田愛人著「横浜バンド史話」築地書館 昭・五六一五頁

(2) 「キダー書簡集」フェリス女学院編訳 教文館 昭・五〇

(3) Dictionary of American Biography III p. 377~378

(4) History of Doremus School 1871~1951 「恩寵と偕に八十年」横浜共立学園八十年史」横浜共立学園編著 昭・二六五六頁

(5) 同右 七頁

(6) " 八頁

(7) 高橋昌郎著「中村敬字」吉川弘文館 昭・四一九〇頁

(8) 日本保育学会編「日本幼児保育史」第一巻 フレーベル館 昭・四三 四七~四八頁

(9) 「横浜共立学園八十年史」前掲書 一〇~一一頁

(10) 同右二〇~二二頁

(11) " 一二頁

(12) " 一八頁

(13) Mrs. L. H. Person "A Quarter of a Century in the Island Empire or the Progress of a Mission in Japan" 1899

(14) 「キダー書簡集」前掲書 七六頁

(15) 「成美学園八十年史」成美学園編 昭・三六 一七頁

☆資料提供

横浜共立学園、お茶の水女子大学桜蔭会、国立音学大学図書館、国際文化会館図書館、片子沢千代松

☆写真掲載

「目で見る宣教百年史」日本基督教団出版部 昭・三四 五四頁 (マンモン・ホーム)